2025 年 3 月 13 日配布

第 367 回山口西田読書会（2025 年 3 月 8 日開催分）のプロトコル

大藤 渉

1. テキスト：「左右田博士に答ふ」五の第 5 段落 317 頁 3 行目から第 5 段落 319 頁 1 行目まで

2. キーワードないしキーセンテンス

「我々の概念的知識が特殊化せられて行くに従って、一歩進んだ特殊は前の一般的なるものを内に包んでいく、最後に如何なる意味に於ても苟も概念的に限定し得られる一般的なるものが全然内に包まれても、尚判断の主語述語の関係から真に無の場所といふものが考へられる、即ち真に思慮分別を絶した、真に直接なる心というものが残るのである、かかる場所に於てあるものが真に直覚的なるものである、自己自身を見るものである。」(318, 8-13)

3. 考察及び問い

西田によれば、特殊がその特殊的方向の最後に一般的なるものを内に包んでなお、「判断の主語述語の関係から真に無の場所といふものが考えられる」といわれる。「判断といふのは特殊なるものが一般なる場所に於てある」(315, 8) といわれることから、西田は特殊ではなく、最後には「判断」の立場をとっているといえる。従来の認識論の「先ず心と物とが相対立し、知るといふのは心の働き」(314, 1) という考えを「極めて素朴的」といいつつも、西田はなぜ「真に直接なる心というものが残る」と考え、判断の立場にたったのか。そして、「真に思慮分別を絶した」ところにおいて成り立つ判断とはどのようなものか。